

青年期における対人依存の様態が妬み感情の喚起に及ぼす影響

— 妬みの適応的・不適応的両側面から —

会見 純佳¹

要旨

本研究では、青年の妬み感情の適応的・不適応的両側面に着目し、対人依存の様態が妬み感情の喚起に及ぼす影響について検討した。大学生 221 名を対象にアンケート調査を実施し、依存性の自己評定尺度の下位尺度「依存拒否」、「依存欲求」、「統合された依存」を独立変数、日本語版 BeMaS 尺度の下位尺度「悪性妬み」、「良性妬み」を従属変数とする重回帰分析を行った。結果、悪性妬みは依存欲求、依存拒否、統合された依存的順に、良性妬みは統合された依存、依存拒否、依存欲求の順に影響力が大きいことが示された。また、依存拒否・依存欲求は悪性妬みに有意な正の影響を、統合された依存は有意な負の影響を示した。依存拒否・統合された依存は良性妬みにとも有意な正の影響を示した。依存欲求は、肯定的な反応を得るために自己と類似した他者を依存対象とすることにより、「獲得可能性」が高い状態であったことから、悪性妬みが強く喚起され、良性妬みに対する依存欲求の影響力が弱くなったと考えられる。そして、依存拒否が自己防衛的な友人関係とされる、一線を引いたつき合いも含めて心理的自立に作用した可能性から良性妬みに正の影響を及ぼしたことが示唆された。

キー・ワード：対人依存、妬み、友人関係、青年期

対人依存の様態

成人の年齢が引き下げられた今日の日本では、青年の自立に関する問題が取り沙汰されている。アイデンティティの確立が発達上の課題となるこの時期においては、他者との適切で良好な関係を築くことが必要不可欠であるが（谷口・齋藤, 2015）、良好な関係を築いていく中で生じる相互作用の1つに他者への依存性があるだろう。藤井（2004）は、現代青年の友人関係について、相手と親密な関係を築きたいと願う一方で、お互いに傷つけあうことを恐れ、過度に親密になることを避けるという、“適度”な距離を模索するために揺れ動いていると指摘している。また、姜・松田（2020）は、大学生における友人関係と精神的健康との関連を検討し、程よい距離感がある関係や切磋琢磨して自己成長につながる関係は精神的健康に肯定的に影響するものの、永続的だと思えるような密接な関係は精神的健康の低下に繋がりやすいこと

を明らかにしている。つまり、こうした不安定さを持ち合わせた友人関係の背後には、青年期特有の依存的未熟さがあると考えられ、青年期においてはどのような依存欲求および様態を示しているのか、再考の必要性があるだろう。

かつては、心理学の研究において依存は未熟の、自立は成熟の象徴として、依存からの脱却が望ましいとされてきた。しかし近年では、自立という現象は依存が変形した状態、あるいは成熟した状態であるとする考え方がとられるようになってきている（西川, 2003）。久米（2001）は、大学生を対象に、一人でいる時と友人といる時の両面で、それぞれ自己の安定性の評定を求めた。その結果、女性においては依存欲求と自己の安定性との間に弱い正の相関がみられ、依存欲求を有することは人格適応に肯定的な意味を持ち得るとして、依存性の適応的意義を報告している。また竹澤・小玉（2004）も、依存欲求と他者信頼感との関係について検討しており、依存欲求の高い人は他者への信頼感が高いという肯定的な特徴を持ち合わ

¹ 愛知淑徳大学大学院心理医療科学研究科

せていると指摘している。こうした対人依存の適応的側面に焦点を当てた研究が増えるなか、依存対象への過剰な依存は、自律性の喪失を促進させたり見捨てられ不安をもたらしたりする（田宮・岡本, 2013）など、不適応的な側面についての指摘も依然として続いている。

そこで本研究では、対人依存の適応的側面および不適応的側面の、両側面について検討していく。依存とは、「道具的な価値ではなく、精神的な助力を求める要求」として高橋（1968, p.7）によって定義されている。そして関（1982）は、高橋（1968）の論を発展させ、対人依存という概念を依存性のあり方として「統合された依存」、「依存欲求」、「依存拒否」の3つに大別し、それぞれ次のように定義している。「統合された依存」は、成熟かつ安定しており、統合された人格に備わっているべき様態、「依存欲求」は、援助・慰め・承認・注意・接触などを含んだ、肯定的な顧慮や反応を他者に求める様態、「依存拒否」は、顕在的には他者への依存を拒否する形で現れるが、潜在的に依存不安があると推測される様態であるとしている。本研究においても依存性のあり方を「統合された依存」、「依存欲求」、「依存拒否」の3つに分類し、関（1982）の定義を使用することとする。

妬み

これまで、対人依存延いては依存性の適応的側面についての研究は、ソーシャル・サポートの授受やストレスコーピングなど、行動面から検討したものが数多くみられた（例えば福岡, 2003；西川, 2003）。一方で、感情面から検討したものは少なく、未だ明らかになっていないことも多い。他者への依存性と感情との関係について、池田（2017）は、対人葛藤場面において拒否されるという対人脅威が絡む場合に、依存欲求の高い人は低い人よりも不安が強く喚起されることを明らかにしている。また、親友との対人葛藤場面では、依存欲求の高い人はよりイライラや恐怖といったネガティブな対人感情を抱く（池田, 2018）ことも指摘されている。このような不安や怒り、恐怖などの感情は、他者との関係の中で生じる感情であることから社会的感情といわれており、他者への

依存性と社会的感情には関連性があることが示唆される。そこで、対人依存と同様に、一般的には不適応的な感情であると捉えられやすい一方で、適応的な側面も併せ持つ妬み感情に焦点を当てて検討していくこととする。妬み感情について澤田（2006）は、社会的比較を通して他者が自分よりも何らかの点で優勢にあると知った際に生じる不快感情であると定義している。そして、Van de Ven et al.（2009）は、妬み感情を「悪性妬み」と「良性妬み」の2つに分類し、前者が優れた他者を引きずり下ろそうとするなど攻撃の意図を含むようなものであるのに対し、後者は自分自身を高めたり向上心に繋がったりするようなモチベーションとなるものであるとしている。したがって、妬みとは悔しさなどのネガティブな感情であるが、それらを他者に対して敵意として表出する働きがあるものを悪性妬み、自身の成長に繋げようとする働きがあるものを良性妬みとして定義する。

では、依存性のあり方は妬み感情の喚起にどのような影響を及ぼすのだろうか。澤田（2008）および澤田・藤井（2016）は、自尊感情に対して、「悪性妬み」は負の相関を示すこと、反対に「良性妬み」は正の相関を示すことを明らかにしている。このことから、妬み感情と自尊感情との強い関係性は示され、依存性のあり方と自尊感情が関係しているということも同様に示唆されている。渡邊・池（2017）は、他者に頼りたくても頼れない要因について検討し、過敏型自己愛傾向の特徴でもある他者からの評価に敏感である傾向や、友人との付き合いの中で自己隠蔽が強いことが、依存欲求と表出行動の差を生むと指摘している。過敏型自己愛傾向は、自尊感情に負の影響を及ぼすことが明らかにされており（小塩, 2002）、それらを踏まえると、他者に頼りたくても頼れないという様態と類似する「依存拒否」も、同様に自尊感情に負の影響を及ぼすことが予想される。しかし、他者に援助を求めることは、自己の立場の弱さや対処能力の低さなどを伝える自我脅威の側面を持つため、利益過多の場合では、被援助者は無能力さが露呈され、自尊感情が低下するとの指摘もある（田宮・岡本, 2013）。つまり、「依存拒否」の様態を示す人は依存することに対して不安があ

り、他者への依存を避けることで自己評価を維持しているとすれば、むしろ援助や是認など肯定的な反応を他者に求める「依存欲求」の様態を示す人の方が、利益過多による自尊感情の低下が起りやすいのではないだろうか。従って、社会的比較によって悪性妬みが喚起された際には、「依存欲求」、「依存拒否」、「統合された依存」の順に強く喚起されるという仮説が立てられる。

一方、Tesser (1991) は、自己評価維持モデルの観点より、他者が自分よりも優れた立場であっても、その状況が自己評価を低下させない場合には悪性妬みは喚起されにくいことを明らかにしている。また、「統合された依存」の様態を示す人は自己像を肯定的に評価するが、「依存拒否」の様態を示す人は自己像の肯定度が低いことが示されている（関，1982）。そもそも、「統合された依存」は、依存対象との関係を自身にとって肯定的なものとして捉え、依存対象との互恵的関係を築いている様態であると田宮・岡本（2013）は報告している。それゆえ、「統合された依存」は社会的比較により妬みが喚起された場合であっても、自己評価は低下しにくく、また自尊感情も低下しにくいと考えられる。従って、良性妬みは「統合された依存」、「依存欲求」、「依存拒否」の順に強く喚起されるのではないだろうか。

研究目的と仮説

以上に基づき本研究では、依存性のあり方が妬み感情の喚起に及ぼす影響について検討することを目的とする。そして次のように仮説を立てた。悪性妬みは「依存欲求」、「依存拒否」、「統合された依存」の順に、良性妬みは「統合された依存」、「依存欲求」、「依存拒否」の順に喚起されるだろう。

方 法

調査対象者

X 県の大学生 221 名を対象に調査を行い、そのうち、下記尺度項目の全項目に欠損のない 206 名（男性 28 名、女性 177 名、答えたくない 1 名）を分析対象とした。調査対象者の平均年齢は 18.87 歳（ $SD = .82$ ）であった。

手続き

2022 年 7 月に、集団的質問紙調査を実施した。また、2023 年 7 月に Google フォームを用いて Web アンケート調査を行った。なお、調査前に、回答は任意であること、回答したくない場合には無理に回答しなくてもよいこと、回答の有無により不利益が生じることはないこと、収集したデータや個人情報には厳重に管理し、調査後に破棄すること等を注意事項に記載した。また、調査後にはデブリーフィングを行い、親しい友人との関係が社会的比較を通じてどの程度妬み感情を喚起させるのか、その時の妬み感情はどのような性質を持つのかを明らかにすることが目的であったという旨を伝えた。

測定項目

質問紙は、依存性のあり方を測定する質問項目、妬み感情を測定する質問項目、フェイスシートの 3 つから構成された。

1) **依存性の自己評定尺度** 依存性のあり方を測定する尺度として、依存性の自己評定尺度（関，1982）を使用した。依存対象は、「あなたにとって心の支えとなったり、あなたの存在を心理的に支える友人を 1 人思い浮かべてください」という指示のもと、「友人」に限定した。それに伴い、各項目における依存対象を示す単語も、統制するためにすべて「友人」に直した。

依存性の自己評定尺度は、援助や慰め、是認など肯定的な顧慮・反応を他者に求める態度である「依存欲求」、成熟・安定しており、統合された人格に備わっているべき態度である「統合された依存」、顕在的には他者に依存することを拒否する形で現れるが、潜在的に依存不安があると推察される態度である「依存拒否」の 3 つの下位尺度から成る。下位尺度はそれぞれ 13 項目であり、緩衝項目 1 項目が加えられた、合計 40 項目で構成されている。本研究においては、緩衝項目を除いた合計 39 項目を依存性の自己評定尺度とした。各項目について、「そうでない」、「どちらかといえばそうでない」、「どちらともいえない」、「どちらかといえばそうである」、「そうである」の 5 段階で評定を求めた。

Table 1

依存性の自己評定尺度の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転後）

質問項目	因子負荷量			共通性
	I	II	III	
因子1 依存拒否因子 ($\alpha = .85$)				
Q37_友人に頼る立場になると、どうも落ち着かない	.82	.06	-.04	.69
Q28_友人の世話になるのは恥ずかしいと思う	.77	.06	.03	.55
Q39_友人に頼み事をするのは、どんな時でも、非常に決心がいる	.74	.03	.15	.45
Q08_友人には、絶対に借りをつくりたくない	.70	-.03	.20	.39
Q32_安心して友人の世話になれない方だ	.69	.11	-.17	.59
Q02_自分のために、友人に何かやってもらうのは苦手だ	.60	.01	-.11	.44
Q12_どんなに困った時でも、友人に頼らない方だ	.59	-.13	-.13	.52
Q27_恩返しできないなら、友人に援助を求めるのは、ためらわれる	.56	.05	.08	.27
Q34_自分のことは、どんなことがあっても自分一人でしないと気がすまない	.52	-.09	.01	.29
Q23_親しい間柄でも、甘えることのない方だ	.46	-.14	-.09	.34
Q05_好意を示されると、とまどうことが多い	.31	.12	-.06	.11
因子2 依存欲求因子 ($\alpha = .85$)				
Q21_何かにつけて、友人に味方になってもらいたい	.07	.77	-.10	.50
Q19_友人から、「元気？」などと気を配ってもらいたい	.01	.71	-.17	.41
Q26_病気の時や、ゆううつな時には、友人に同情してもらいたい	.01	.71	-.12	.42
Q17_困っている時や悲しい時には、友人に気持ちをわかってもらいたい	-.06	.62	.13	.52
Q09_何かをする時には、友人にはげましてもらいたい	-.05	.60	.11	.46
Q35_重要な決心をする時は、いつも、友人の意見がききたい	.17	.59	.07	.36
Q24_悪い知らせ、悲しい知らせなどを受取る場合には、友人と一緒にいてもらいたい	.05	.55	-.02	.28
Q06_何か迷っている時には、友人に「これでいいですか？」と聞きたい	-.07	.47	.09	.31
Q31_一人で決心がつきかねる時には、友人の意見に従いたい	-.12	.47	.12	.36
Q07_できることなら、どこへ行くにも友人と一緒にいきたい	.15	.42	.22	.28
Q10_友人には、いざという時には、無理な頼み事もするだろう	-.23	.33	-.02	.18
因子3 統合された依存因子 ($\alpha = .86$)				
Q03_自分の信頼できる友人がいるので安心だ	-.06	-.21	.85	.63
Q04_友人のことを思い浮かべて、元気を出すことがある	.13	-.10	.84	.53
Q18_思い出すだけで、心がやすらくなるような友人がいるので、落ち着いていられる	.14	.07	.77	.55
Q22_友人は、心の支えになってくれる	-.04	.08	.75	.67
Q29_自分を見守ってくれているように思う友人がいるので、大事な場面も切りぬけられる	.02	-.01	.66	.42
Q01_一人ではどうにもならない時は、その時々で友人に相談する	-.13	.09	.50	.39
Q14_私がどんなことをしようと、友人は理解してくれる	.04	.16	.49	.33
Q30_自分と相手の立場を尊重しつつ、必要な時には、うまく頼ったり頼られたりする方だ	-.20	.02	.39	.28
Q36_直接手助けしてもらわないが、友人に話をすることで、自分の判断がしやすくなることもある	-.08	.19	.34	.26
削除項目				
Q11_自分のことを友人に相談するのは、何か不安である	.60	-.26	.17	
Q33_むずかしい仕事をする時には、できれば友人と一緒にしたい	.33	-.06	.25	
Q15_友人には少々無理を言ってもいい	-.35	.27	-.22	
Q38_親切的な申し出を、特に理由なく、断ることがある	.20	.04	-.18	
Q20_できることなら、いつも友人と一緒にいたい	.26	.47	.25	
Q13_最後は自分できめるにせよ、困った時には、友人の意見も求めてみる	-.22	.32	.28	
Q25_うれしいこと、楽しいことは、まず友人に報告したい	.10	.45	.29	
Q16_友人とは、支え合って生きていくものだと感じる	.01	.28	.40	
因子間相関				
	I	-.23	-.48	
	II		.51	

Table 2

日本語版 BeMaS 尺度の因子分析結果（最尤法・プロマックス回転後）

質問項目	因子負荷量		共通性
	I	II	
因子1 悪性妬み因子 ($\alpha = .86$)			
Q06_友人を羨ましく思うと、友人へ悪意を感じる	.88	-.03	.78
Q08_羨ましいと思う気持ちは、友人を嫌いにさせる	.85	-.07	.72
Q10_友人の成果を見ると、私はムカついてしまう	.79	.06	.62
Q02_友人が優れていると、有利さを失うように、私は願う	.76	.07	.59
Q05_もし友人が、私が欲しいと思っているものを持っていたら、私はそれを取り上げたいと思う	.70	.01	.48
因子2 良性妬み因子 ($\alpha = .83$)			
Q03_もし友人が私よりも優れていると気づいたら、自分をもっと高めようとする	.01	.87	.75
Q04_友人を羨ましがめることは、私にとって目標を達成する刺激になる	-.10	.83	.69
Q07_友人の優れた結果に、私も追いつこうと努力する	-.16	.82	.69
Q01_友人を羨ましいと思うとき、私は今後どうすれば同じように成功出来るかと考える	.21	.71	.56
Q09_もし友人に優れた資質や成果、または持ち物があるなら、私はそれを自力で手に入れようとする	.10	.63	.41
	因子間相関 I		.05

2) 日本語版 BeMaS 尺度 妬み感情を測定する尺度として、Lange & Crusius (2015) が作成したものを澤田・藤井 (2016) が邦訳した、日本語版 BeMaS 尺度を使用した。妬み感情を抱く対象は、「質問 1 で思い浮かべた友人を、引き続き想起してください」という教示のもと、「依存対象と同一の友人」に限定した。それに伴い、各項目における妬む対象を示す単語も、統制するためにすべて「友人」に直した。

日本語版 BeMaS 尺度は、自分自身を高めたり、向上心に繋がったりするような感情である「良性妬み」と、優れた他者を引きずり下ろそうとするなど、攻撃の意図を含むような感情である「悪性妬み」の 2 つの下位尺度 5 項目ずつから成る。各項目について、「全くあてはまらない」、「あてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「少しあてはまる」、「あてはまる」、「とてもあてはまる」の 6 段階で評定を求めた。

3) フェイスシート 調査対象者の性別、年齢について回答を求めた。

結 果

尺度の検討

依存性の自己評定尺度、日本語版 BeMaS 尺度の下位尺度構造を確認するために、それぞれ因子分析を行った。

1) 依存性の自己評定尺度 依存性の自己評定

尺度の 39 項目について因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行ったところ、解釈可能な 3 つの因子を抽出した。39 項目のうち、因子負荷量が .30 以下の項目と、複数の因子への負荷量が .25 以上ある項目を削除基準とした。尺度の信頼性を保ちつつ関 (1982) にならって、基準に該当した計 8 項目を削除し、再度因子分析を行った。その結果、全ての項目がいずれか 1 つの因子に対して高い因子負荷を示した (Table 1)。回転前の 3 因子での累積寄与率は 41.14% であった。

第一因子は「友人に頼る立場になると、どうも落ち着かない」、「自分のために、友人に何かやってもらうのは苦手だ」など、他者に依存することを拒否するような態度を表わす項目が高く負荷していたため、「依存拒否」と命名した。第二因子は「何かにつけて、友人に味方になってもらいたい」、「困っている時や、悲しい時には、友人に気持ちをわかってもらいたい」など、他者に依存的な態度を表す項目が高く負荷していたため、「依存欲求」と命名した。しかし、「友人には、いざという時には、無理な頼み事もするだろう」という項目は、関 (1982) では本来、「統合された依存」尺度に含まれる項目であったが、本研究においては第二因子に高く負荷していた。項目の内容について再度検討すると、いざという時、つまり重大な局面に直面した時には友人の意見や判断に身を任せたいという点から、他者に援助を積極的に求める様態

Table 3

依存性の自己評定尺度における各尺度得点

	男性			女性			t値
	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値	標準偏差	標準誤差	
依存拒否	2.71	.62	.12	2.64	.82	.06	.44
依存欲求	3.16	.84	.16	3.56	.68	.05	2.78 **
統合された依存	3.66	.78	.15	4.01	.66	.05	2.54 *

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 4

日本語版 BeMaS 尺度における各尺度得点

	男性			女性			t値
	平均値	標準偏差	標準誤差	平均値	標準偏差	標準誤差	
悪性妬み	1.95	.86	.16	2.24	1.03	.08	1.43
良性妬み	4.06	1.00	.19	4.12	1.01	.08	.30

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

であると考えられる。そして、こうした行動は、援助を求めることが多少強引であったとしても、難局を乗り切るためには他者を利用あるいは頼りにしたいという欲求に基づくものであると考えられるため、本研究ではこの項目を「依存欲求」に含めることとした。第三因子は「自分を見守ってくれているように思う友人がいるので大事な場面も切りぬけられる」、「自分と相手の立場を尊重しつつ、必要な時には、うまく頼ったり頼られたりする方だ」など、他者との相互依存的な態度を表わす項目が高く負荷していたため、「統合された依存」と命名した。各下位尺度の α 係数は、「依存拒否」において.85、「依存欲求」において.85、「統合された依存」において.86となり、十分な信頼性が得られた。

2) 日本語版 BeMaS 尺度 日本語版 BeMaS 尺度の10項目について因子分析(最尤法・プロマックス回転)を行ったところ、2因子性を確認できた。そして、全ての項目がいずれか1つの因子に対して高い因子負荷を示し(Table 2)、澤田・藤井(2016)の結果と一致していた。なお、回転前の2因子での累積寄与率は62.83%であった。

第一因子は「羨ましいと思う気持ちは、友人を嫌いにさせる」、「友人の成果を見ると、私はムカ

ついてしまう」など、優れた他者に対して攻撃的な感情を表わす項目が高く負荷していたため、「悪性妬み」と命名した。第二因子は「友人の優れた結果に、私も追いつこうと努力する」、「友人を羨ましがめることは、私にとって目標を達成する刺激になる」など、自分自身を高めるような感情を表わす項目が高く負荷していたため、「良性妬み」と命名した。各下位尺度の α 係数は、「悪性妬み」において.86、「良性妬み」において.83となり、十分な信頼性が得られた。

依存性のあり方および妬み感情と性別との関連

依存性あり方と性別との関連を検討するために、依存性の自己評定尺度における各下位尺度の平均値、標準偏差および標準誤差を算出した(Table 3)。

性別を独立変数、「依存拒否」、「依存欲求」、「統合された依存」を従属変数とする対応のないt検定を行った。その結果、「依存欲求」得点では、女性の方が男性よりも有意に高かった($t(203) = 2.78, p = .006$ (95% CI: $-.68 \sim -.12$))。また、「統合された依存」得点でも、女性の方が男性よりも有意に高かった($t(203) = 2.54, p = .012$ (95% CI: $-.62 \sim -.08$))。そして、「依存拒否」得点について

Table 5
各要因の相関係数

	依存性のあり方			妬み感情	
	依存拒否	依存欲求	統合された依存	悪性妬み	良性妬み
依存性のあり方					
依存拒否	—				
依存欲求	-.23 **	—			
統合された依存	-.48 **	.51 **	—		
妬み感情					
悪性妬み	.27 **	.24 **	-.18 *	—	
良性妬み	-.03	.26 **	.34 **	.05	—

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 6
「依存拒否」・「依存欲求」・「統合された依存」と「悪性妬み」との関連

	偏回帰係数	標準誤差	95%信頼区間		標準 偏回帰係数 (β)
			下限	上限	
依存拒否	.29	.09	.11	.46	.23 **
依存欲求	.62	.10	.42	.82	.44 **
統合された依存	-.43	.12	-.66	-.20	-.29 **

$R^2 = .22$
Adj $R^2 = .21$

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

Figure 1
「悪性妬み」との関連のパス図

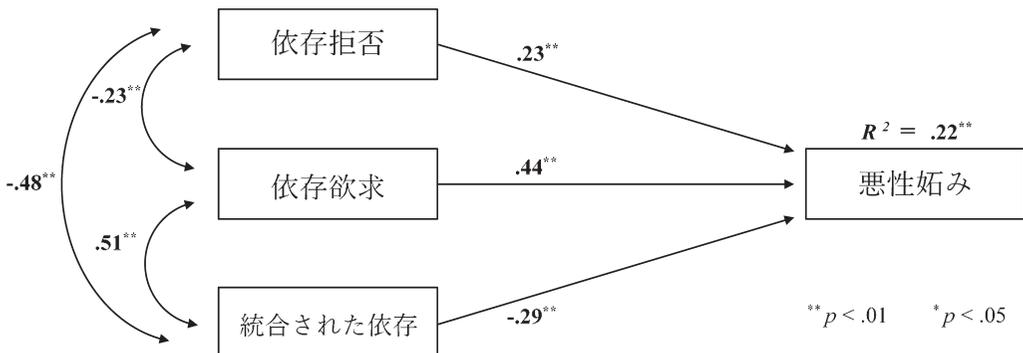


Table 7

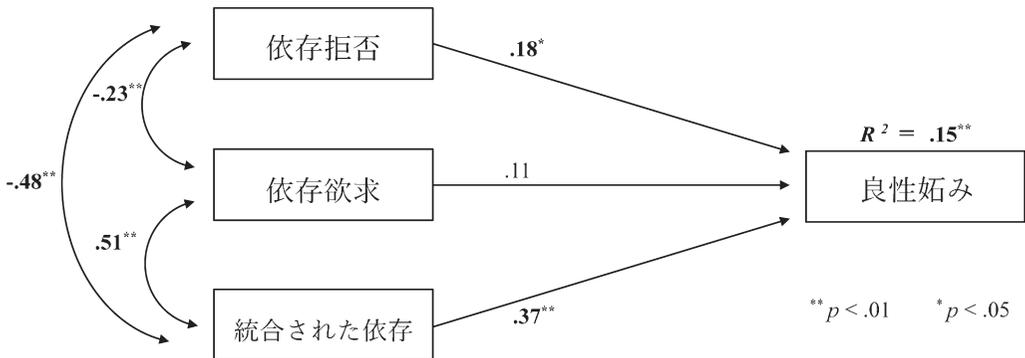
「依存拒否」・「依存欲求」・「統合された依存」と「良性妬み」との関連

	偏回帰係数	標準誤差	95%信頼区間		標準 偏回帰係数 (β)
			下限	上限	
依存拒否	.22	.09	.04	.41	.18*
依存欲求	.15	.11	-.05	.36	.11
統合された依存	.55	.12	.30	.79	.37**
$R^2 = .15$					
Adj $R^2 = .14$					

注) ** $p < .01$, * $p < .05$

Figure 2

「良性妬み」との関連のパス図



は性別による有意な差は見られなかった ($t(203) = .44, ns$)。この結果は、「依存欲求」得点と「統合された依存」得点において性差が見られたという点で、関 (1982) を支持するものとなったが、「依存拒否」得点で性差が見られなかった点は、異なる結果であった。

同様に、妬み感情と性別との関連を検討するために、日本語版 BeMaS 尺度における各下位尺度の平均値、標準偏差および標準誤差を算出した (Table 4)。

性別を独立変数、「悪性妬み」、「良性妬み」を従属変数とする対応のない t 検定を行った。その結果、「悪性妬み」、「良性妬み」ともに性別による有意な差は見られなかった ($t(203) = 1.43, ns$; $t(203) = .30, ns$)。この結果は、澤田・藤井 (2016) を支持するものとなった。有意差が見られた下位尺度もあったが、性別の人数差が2倍以上ある点を考慮し、本研究では全体で検討を行うこととした。

各尺度間の相関

依存性の自己評定尺度の下位尺度である「依存拒否」、「依存欲求」、「統合された依存」と、日本語版 BeMaS 尺度の下位尺度である「悪性妬み」、「良性妬み」との相関係数を算出した (Table 5)。その結果、「依存拒否」と「依存欲求」との間に有意な弱い負の相関がみられた ($r = -.23, p = .001$)。また、「依存拒否」と「統合された依存」との間にも中程度の負の相関がみられた ($r = -.48, p = .000$)。そして、「依存欲求」と「統合された依存」との間に中程度の正の相関がみられた ($r = .51, p = .000$)。「依存拒否」と「悪性妬み」との間に有意な弱い正の相関がみられた ($r = .27, p = .000$) 一方で、「良性妬み」との間には有意な相関はみられなかった ($r = -.03, ns$)。また、「依存欲求」は「悪性妬み」および「良性妬み」の両者に対して、それぞれ有意な弱い正の相関を示した ($r = .24, p = .001$; $r = .26, p = .000$)。さらに、「統合された依

存」は「良性妬み」との間に有意な正の相関がみられた ($r = .34, p = .000$) 一方で、「悪性妬み」との間にはほとんど相関はみられなかった ($r = .18, p = .011$)。そして、「悪性妬み」と「良性妬み」との間には、有意な相関はみられなかった ($r = .05, ns$)。

依存性のあり方と妬み感情との関連

依存性の自己評定尺度の下位尺度を独立変数、日本語版 BeMaS 尺度の下位尺度である「悪性妬み」を従属変数とする重回帰分析を行った (Table 6, Figure 1)。その結果、重決定係数は $R^2 = .22$ であり、モデルの適合性が十分ではなかった ($p = .000$)。依存性の自己評定尺度の下位尺度である「依存拒否」は、有意な標準偏回帰係数を示した ($\beta = .23, p = .002$ (95% CI: .11~.46))。したがって、「依存拒否」は「悪性妬み」に有意な正の影響を及ぼすことが示唆された。また、「依存欲求」も有意な標準偏回帰係数を示し ($\beta = .44, p = .000$ (95% CI: .42~.82))、「悪性妬み」に有意な正の影響を及ぼすことが示唆された。一方、「統合された依存」は有意な標準偏回帰係数を示し ($\beta = -.29, p = .000$ (95% CI: -.66~- .20))、「悪性妬み」に有意な負の影響を及ぼすことが示唆された。

同様に、依存性の自己評定尺度の下位尺度を独立変数、日本語版 BeMaS 尺度の下位尺度である「良性妬み」を従属変数とする重回帰分析を行った (Table 7, Figure 2)。その結果、重決定係数は $R^2 = .15$ であり、モデルの適合性が十分ではなかった ($p = .000$)。依存性の自己評定尺度の下位尺度である「依存拒否」は、有意な標準偏回帰係数を示した ($\beta = .18, p = .017$ (95% CI: .04~.41))。したがって、「依存拒否」は「良性妬み」に有意な正の影響を及ぼすことが示唆された。また、「統合された依存」も有意な標準偏回帰係数を示し ($\beta = .37, p = .000$ (95% CI: .30~.79))、「良性妬み」に有意な正の影響を及ぼすことが示唆された。一方、「依存欲求」は有意な標準偏回帰係数を示さなかった ($\beta = .11, ns$)。

考 察

本研究の目的は、他者への依存性のあり方が妬

み感情の喚起に及ぼす影響について検討することであった。そこで、「悪性妬みは「依存欲求」、「依存拒否」、「統合された依存」の順に強く喚起される」、「良性妬みは「統合された依存」、「依存欲求」、「依存拒否」の順に強く喚起される」という2つの仮説を立て、アンケート調査を行った。

その結果、「悪性妬み」を従属変数とした重回帰分析における標準偏回帰係数は、「依存拒否」で .23、「依存欲求」で .62、「統合された依存」で -.43 を示し、「依存欲求」、「依存拒否」、「統合された依存」の順に影響力が大きいことが明らかになった。従って、「悪性妬み」についての仮説は支持されたといえる。また、「悪性妬み」に対して「依存拒否」および「依存欲求」は有意な正の影響を及ぼし、「統合された依存」は有意な負の影響を及ぼすことが分かった。一方で、「良性妬み」を従属変数とした重回帰分析における標準偏回帰係数は、「依存拒否」で .22、「依存欲求」で .15、「統合された依存」で .55 を示し、「統合された依存」、「依存拒否」、「依存欲求」の順に影響力が大きいことが明らかになった。従って、良性妬みについての仮説は一部支持された。また、「良性妬み」に対して「依存拒否」と「統合された依存」はともに有意な正の影響を及ぼすことが分かった。

上記の結果より、依存性のあり方は妬み感情を喚起させる変数の1つであることが示唆された。そして、「悪性妬み」に対する依存性のあり方の影響については、仮説を支持する結果が得られたため、依存性のあり方と自尊感情との関係を検討した渡邊・池(2017)や小塩(2002)、田宮・岡本(2013)、さらには妬み感情と自尊感情との関係を検討した澤田(2008)を裏付けるものとなったといえるだろう。では、なぜ「良性妬み」と依存性のあり方との関係は仮説と相違する結果となったのか。「良性妬み」に対して、「依存拒否」よりも「依存欲求」の方が弱い影響力を示した点と、「依存拒否」が正の影響を及ぼした点の2つの観点より、その理由について考察していく。

第一に、「依存欲求」が及ぼす「良性妬み」への影響力が弱い点については、獲得可能性の高さが影響したと考えられる。妬みを喚起させる要因は、これまで様々な研究が実施され、それらは自

尊感情や原因の帰属など個人の特性や認知に関する要因、あるいは比較する他者や比較する次元など外的な関係性による要因に大別される。その中で、澤田（2006）は個人内の要因として獲得可能性を挙げており、獲得可能性とは、自分が欲しいと思っているものを他者が持っている状況において、その欠けているものを将来自分がどの程度獲得できるかという認知であると述べている。そして、獲得可能性が高いほど「悪性妬み」が強く喚起されることが報告されている（澤田，2003；坪田，2011）。また、Byrne（1971）は二者間の態度が類似しているほど対人魅力は増大することを指摘しているほか、人間は自己を評価するように動機づけられているため、自己と類似した他者は、自己の特質の一致による妥当性を与えてくれる存在であり、それらは報酬としてみなされることを明らかにしている。「依存欲求」は、肯定的な反応を他者に求めるものと定義されることに加え、「何かにつけて、友人には味方になってもらいたい」というような項目から構成されている。自己を認めてもらうためには、依存対象が自己の態度や価値観と似ている必要があり、言い換えるならば、質問紙で選んだ対象は自己と類似しているからこそ、依存対象として挙げられたのだと考えられる。しかし、自己と類似した対象に依存することで、依存対象が常に比較する相手となるだけでなく、経済状況や学業水準など物事の遂行レベルも自己と類似していることが予想される。すると、相手の有利さに自分が完全に及ばないという状況ではないことから、獲得可能性は高いといえる。従って、「悪性妬み」が強く喚起され、ゆえに、「良性妬み」への影響力は小さいという結果になったのではないだろうか。

第二に、「依存拒否」が「良性妬み」に対して正の影響を及ぼした点については、「依存拒否」の様態が心理的自立に作用した可能性が考えられる。山田（2011）は、大学生の心理的自立に影響を与える要因について検討し、心理的自立を測定する尺度を作成している。大学生の心理的自立尺度は5つの下位尺度から構成され、そのうち「自己決定と責任」は、「困難な問題に遭遇しても、できるだけ自分で解決しようとする」、「困った時でも、

人の助けを借りずに自分で判断している」などの項目から構成されている。本研究の依存性尺度における「依存拒否」に関しても、「自分のことは、どんなことがあっても自分一人でしないと気がすまない」、「どんなに困った時でも、友人には頼らない方だ」というような項目から構成され、互いに項目の内容が類似している。また、同尺度の「個別性の未確立（逆転項目として扱われている）」は、「どこへ行くにも誰かと一緒にないと不安を感じる」、「人から「元気？」などの気配りの言葉がないと寂しい」などの項目から構成されるが、依存性尺度の「依存欲求」も、「できることなら、どこへ行くにも友人と一緒にいきたい」、「友人から、「元気ですか」などと気を配ってもらいたい」という項目から構成されている。本研究における「依存拒否」は、「依存欲求」の対極概念として捉えられることから、「依存拒否」の様態を示す人は、「個別性の未確立」の項目に低い評価をすることが予想される。つまり、「依存拒否」の様態を心理的に自立しているとみなすことも可能であると考えられる。また、山田（2011）が実施した心理的自立と友人関係についての研究では、女性の場合には、友人関係の「一線を引いたつき合い」が心理的自立に正の関連を示すことが明らかになった。梶田（1988）は、友人と心理的に距離を取ることで心理的自立を達成しようとする段階について、まだ自立できていない発展途上の段階であると指摘しており、「一線を引いたつき合い」は、あまり他者との関わりを持たず、お互いに深いところまで立ち入らないという自己防衛的な友人関係だとしている（小塩，1998）。従って、本研究においては、友人との「一線を引いたつき合い」も含めて、「依存拒否」が心理的自立に作用したと考えられる。心理的自立は、大石・松永（2008）によって自尊心との間に正の相関があることが示唆されていることから、「良性妬み」にも正の相関を示した一方で、実際には心理的に自立できていない自己防衛的な関係を築いているという側面からは、渡邊・池（2017）および小塩（2002）を支持するような悪性妬みに正の相関を示す結果になったのではないだろうか。

今後の課題

本研究は、モデルの適合性の低さが課題として残る。その理由として、依存様態以外に妬み感情の喚起に交絡する要因があったと考えられる。Mikulincer, Bizman, & Aizenberg (1989) は、物事の原因を自己に追究する内的帰属を行った場合に、悪性妬みが強く喚起されることを明らかにしており、妬みの喚起要因として原因の帰属を指摘している。本研究においては、質問文に帰属情報は含まれておらず、調査対象者が自由に帰属様式を決定することができた。しかし、実際に調査対象者がどのような帰属をしたのかは不明であり、帰属様式と妬みの喚起との関連性を検討することはできていないため、今後検討すべき点であろう。また、本研究では性別の人数差が2倍以上あったことから、性差の検討ができていない。女性は、性役割の一部として依存的な要求や行動が許され、男性は人に頼らない方が良いとされるステレオタイプ的な社会的性役割観や、女性の方が男性よりも悪性妬みを経験しやすいという澤田・新井(2002)の知見などを考慮すると、やはり性差について検討することは必要不可欠であると考えられる。さらに、桜井(1984)は、社会的望ましさは女性に顕著であることを指摘している。本研究において扱った依存や妬みといった概念は、近年、適応的な側面が見出されつつあるが、一般的には不適応的な側面が先行しやすいものであったと考えられる。先述したとおり、他者への依存が自立できていないことと結び付けられやすかったり、他者への攻撃性を含んだネガティブな感情だけが妬み感情であると認識されてしまっていたりするため、未成熟で不適応的な自身を隠そうと社会的望ましさバイアスが働いた可能性も十分に考えられる。したがって、性差の検討延いては社会的望ましさの検討が必要であろう。

以上、こうした様々な要因が依存様態以外に妬み感情の喚起に影響を及ぼしていたと考えられる。また、モデルの適合性の低さに対する課題以外にも、調査項目を見直すなどして、研究の幅を広げていくことも求められるのではないか。本研究では、心理的に支えてくれる友人がいるだろう

という前提のもとでアンケートへの回答を求めたが、実際にはそのような友人がいない調査対象者もいた可能性が考えられる。また、1人しかいない中でその対象を選んだのか、それとも複数人いる中で選んだのかによっても依存のあり方や質は異なってくるだろうし、その対象との親密度も影響を及ぼす要因として考えられる。そして、本研究においては対人依存のあり方が妬み感情の喚起に影響するとして検討を行ったが、喚起される妬み感情によって他者への依存を強化していた可能性もあるだろう。そのため、対人依存と妬み感情の関係性を入れ替えて再分析することで、新たに知見を得ることができるかもしれない。

今後はこれらを再検討することで、研究の精度を高められるだけでなく、不適応行動に繋がる前の支援として、実践で生かすことも可能になるのではないだろうか。

付 記

本論文は、2022年度に愛知淑徳大学心理学部に提出した卒業論文の一部であり、日本青年心理学会第31回大会において発表した原稿に加筆修正したものである。本論文を執筆するにあたり、西出隆紀先生（愛知淑徳大学）にご指導いただきました。厚くお礼を申し上げます。また、大会発表当日、半澤礼之先生（北海道教育大学）をはじめ、多くの先生方に貴重なご助言をいただきました。この場をお借りして心よりお礼申し上げます。

引用文献

- Byrne, D. (1971). *The attraction paradigm*. New York: Academic Press.
- 藤井 恭子 (2004). 青年期の友人関係における心理的距離に関する研究動向と発達の意義 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 7, 279-288.
- 福岡 欣治 (2003). 他者依存性と心理的苦痛の関係に及ぼすソーシャル・サポートの影響 対人社会心理学研究, 3, 9-14. <https://doi.org/10.18910/8541>
- 久米 禎子 (2001). 依存のあり方を通してみた青年期の友人関係——自己の安定性との関連か

- ら—— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 47, 488-499.
- 池田 亜沙 (2017). 対人葛藤場面において対人依存が他者受容感に及ぼす影響 日本心理学会大会発表論文集, 81, 138. https://doi.org/10.4992/pacjpa.81.0_2B-011
- 池田 亜沙 (2018). 対人依存が対人葛藤場面における対人感情および行動パターンに及ぼす影響 日本教育心理学会総会発表論文集, 60, 606. https://doi.org/10.20587/pamjaep.60.0_606
- 梶田 叡一 (1988). 自己意識の心理学 第2版 UP選書 東京大学出版会
- 姜 信善・松田 栞里 (2020). 青年期における友人関係と精神的健康との関連についての検討 富山大学人間発達科学部紀要, 14, 1-14.
- Lange, J., & Crusius, J. (2015). Dispositional envy revisited: Unraveling the motivational dynamics of benign and malicious envy. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 41, 284-294. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1177/0146167214564959>
- Mikulincer, M., Bizman, A., & Aizenberg, R. (1989). An attributional analysis of social-comparison jealousy. *Motivation and Emotion*, 13, 235-258. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1007/BF00995537>
- 西川 隆蔵 (2003). 対人依存行動の研究——対人依存の自己制御と自己意識, ソーシャルスキル, 及び対人適応感との関係の検討—— 人間文化学部研究年報, 5, 1-19.
- 大石 美佳・松永 しのぶ (2008). 大学生の自立の構造と実態——自立尺度の作成—— 日本家政学会誌, 59, 461-469. <https://doi.org/10.11428/jhej.59.461>
- 小塩 真司 (1998). 青年の自己愛傾向と自尊感情, 友人関係のあり方との関連 教育心理学研究, 46, 280-290. https://doi.org/10.5926/jjep1953.46.3_280
- 小塩 真司 (2002). 自己愛傾向によって青年を分類する試み—対人関係と適応, 友人によるイメージ評定からみた特徴— 教育心理学研究, 50, 261-270. https://doi.org/10.5926/jjep1953.50.3_261
- 桜井 茂男 (1984). 児童用社会的望ましさを測定尺度 (SDSC) の作成 教育心理学研究, 32, 310-314. https://doi.org/10.5926/jjep1953.32.4_310
- 澤田 匡人 (2003). 児童・生徒における妬み感情とその対処方略 筑波大学心理学研究科博士論文
- 澤田 匡人 (2006). 子どもの妬み感情とその対処——感情心理学からのアプローチ—— 新曜社
- 澤田 匡人 (2008). シャーデンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響—罪悪感, 自尊感情, 自己愛に着目して—— 感情心理学研究, 16, 36-48. <https://doi.org/10.4092/jsre.16.36>
- 澤田 匡人・新井 邦二郎 (2002). 妬みの対処方略選択に及ぼす, 妬みの傾向, 領域重要度, および獲得可能性の影響 教育心理学研究, 50, 246-256. https://doi.org/10.5926/jjep1953.50.2_246
- 澤田 匡人・藤井 勉 (2016). 妬みやすい人はパフォーマンスが高いのか? ——良性妬みに着目して—— 心理学研究, 87, 198-204. <https://doi.org/10.4992/jjpsy.87.15316>
- 関 知恵子 (1982). 人格適応面からみた依存性の研究——自己像との関連において—— 臨床心理事例研究, 9, 230-247.
- 高橋 恵子 (1968). 依存性の発達の研究: I ——大学生女子の依存性—— 教育心理学研究, 16, 7-16.
- 谷口 美奈・齋藤 眞 (2015). 青年期におけるアイデンティティの確立と依存性との関連 愛知学院大学心身科学部紀要, 11, 35-46.
- 竹澤 みどり・小玉 正博 (2004). 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討 教育心理学研究, 52, 310-319. https://doi.org/10.5926/jjep1953.52.3_310
- 田宮 沙紀・岡本 裕子 (2013). 青年期における依存性様態の検討——依存対象に焦点を当てて—— 広島大学心理学研究, 13, 129-149.
- Tesser, A. (1991). Emotion in social comparison and

- reflection processes. In J. Suls & T. A. Wills (Eds.), *Social comparison: Contemporary theory and research* (pp. 115-145). Hillsdale: Lawrence Erlbaum Associates, Inc.
- 坪田 雄二 (2011). 妬みの生起における予期の役割 対人社会心理学研究, *11*, 101-108. <https://doi.org/10.18910/9803>
- Van de Ven, N., Zeelenberg, M., & Pieters, R. (2009). Leveling up and down: The Experiences of Benign and Malicious Envy. *Emotion*, *9*, 419- 429. <https://psycnet.apa.org/doi/10.1037/a0015669>
- 渡邊 つかさ・池 志保 (2017). 他者に頼りたくても頼れない要因——自己愛と友人との付き合い方の観点から—— 福岡県立大学心理臨床研究, *9*, 65-74.
- 山田 裕子 (2011). 大学生の心理的自立の要因ならびに適応との関連 青年心理学研究, *23*, 1-18. https://doi.org/10.20688/jsyap.23.1_1

Effect of Interpersonal Dependence on Envy in Adolescents: Focusing on the adaptive and maladaptive aspects of envy

Sumika Aimi (*Graduate School of Psychology and Medical Sciences, Aichi Shukutoku University*)

The purpose of the present study was to examine the effect of interpersonal dependency status on the arousal of envy, focusing on both adaptive and maladaptive aspects of envy in adolescents. A questionnaire survey was administered to 221 university students, and multiple regression analysis was conducted using the “Dependence Rejection,” “Dependence Desire,” and “Integrated Dependence” subscales of the Self-Rating Scale of Dependence as independent variables and the “Malicious Envy” and “Benign Envy” subscales of the Japanese BeMaS Scale as dependent variables. The results showed that malicious envy was more influential in the order of desire to depend, dependence rejection, and integrated dependence, while benign envy was more influential in the order of integrated dependence, dependence rejection, and dependence desire. Dependence rejection and dependence desire had a significant positive effect on malicious envy, while integrated dependence had a significant negative effect. Both dependence rejection and integrated dependence showed significant positive effects on benign envy. Since the desire for dependence was likely to lead to individuals making themselves similar to the object of dependence in order to obtain a positive response, and also had a high “attainability,” malicious envy was strongly aroused, and the effect of the desire for dependence on benign envy was weakened. It was also suggested that “dependence rejection” had a positive effect on “benign envy” due to the possibility that “dependence rejection” acted on psychological independence, including the drawing of a line, which is considered to be a self-protective friendship.

Key words: Interpersonal dependence, envy, friendship, adolescents